

いやあ、ニューヨーク・トリオはいい。私はいま、ニューヨーク・トリオに首ったけなのだが、なぜなのだろうと考えてみた。

考えるとと言ってもジャズというのは考えるものではない。本能のおもむくままに聴けばいいんだよ。

それが正論だろうが、正論が通らないのもまたジャズである。ここは一つ、腰をすえて考えてみようではないか。ニューヨーク・トリオのすばらしさ、を。

やっばり、王道なのだと思う。

ジャズというのはいつも王道から外れようとして生きてきた。王道の価値を認めながら、なんとか「外道」の価値を作ろうと一生懸命実験努力してきたのがジャズの歴史である。私はその努力を認めないではない。大したものだと思う。

しかし、やっばりいつの間にか「王道」に戻るのがジャズの歴史なのである。一部定着したものもあるが、核は核として厳然として残ってゆく。

ジャズ界はよく「垣根を越えた」という言い方をする。一見、格好よい。たとえばわがビル・チャーラップと同年代のブラッド・メルドー。天才のようにもてはやされ、次々に作風を変えてゆくが、作風を変える生き方のゆく先は消滅あるのみ。垣根を越えると二度と内側へ戻ってこれられないのである。

だからそこへいくとビル・チャーラップは垣根の中でいろいろ新しい試みを行おうと奮励努力する。長続きするのである。

長続きするもう一つの原因、それはピアニストが歌心をたくわえているからだ。歌というのは永遠である。作風はやスタイルー過性というデメリットを持つが、歌心はファンの気持ちの中に長く生き続けてゆく。

これまで何作か、ニューヨーク・トリオはピアニストの心の中で育ってきた幾多の歌を銀盤に注入してきた。今度は新しい試みとしてエリントンの曲集ときたものである。これはビル・チャーラップ自身の発案ということであるが、私は最初エリントン曲集と聞いて感心しなかった。ありがちな、そう思った。だってそうでしょう。ミュージシャンというのは古今東西、エリントン集とモンク集をやりたくて生まれてきたようなものである。本人は初めてだから新しく感じるし張り切りもするが、何十年もジャズを聴いてきた耳には特にどうということはない。

ところが聴いて、これは少し違うなど思った。

これまでのエリントンやモンク集に必ずついてまわる「匂い」がない。つまり、ビル・チャーラップにはエリントン風にトグロを巻くスタイルでやろうという気持ちがなかった。オレ流にやろうという意志だけがあったのである。オレ流エリントン曲集。

敬意は払うが曲を借りるだけだよ、と。オレのジャズにしてしまうものね。焼こうが煮ようがオレの勝手だものね、という心意気が男らしくて格好よいのである。エリントンに平伏するのではなくて同列に置いてしまったのだ。大したやつである、チャーラップは。私にとってこれまでのものとは一味も二味も違うエリントン曲集になったのだ。

一言、言わずもがなを言わせていただくと、私はエリントンの曲がそれほど好きではない。否、歌物好き、スタンダード好きのファンでエリントンの曲が大好きという人にかこれまでお目にかかったことがない。

コール・ポーターやリチャード・ロジャース、そういう普通の作曲家の人たちの作風と明らかにどこかが違う。ゴツゴツしているというか最初から人の気持ちをなごませようとか優しくさせようとかする心遣いがない。なにかか別なものを表現しようとしているのだ。

しかし、ビル・チャーラップはエリントンの曲を使って人の気持ちをほぐそうとしているのである。いや、彼にそういう気遣いや意図はないかもしれない。しかし、音楽がそういう音楽になっているのである。ビル・チャーラップの弾くエリントン曲は聴く人の気持ちを優しくしてしまう。

たとえば、1曲目の「スター・クロスト・ラバース」を聴いてほしい。これを聴いてホッとしない人がいたら名乗り出てもらいたい。この1曲目



にビル・チャーラップの本性があると思う。私はチャーラップの最もすぐれたところはスロー・バラードだと確信している。

私はホッとして聴いているが、チャーラップはホッとして弾いていない。チャーラップはどんなにゆっくりの曲であろうと全身をふるえるように動かせて弾いている。一音一音に全霊をこめているのだ。

エリントンの曲では「イン・ア・センチメンタル・ムード」があくまで有名だが、最も甘美な曲は「スター・クロスト・ラバース」だ。曲名からしてロマンスがあるし、あのエリントンのどこにこんな甘さがあったのだろうと疑ってしまう。もっともっと有名になっていい曲である。

「Cジャム・ブルース」はなんといってもレッド・ガーランドだよ。そう言いつつ、新しいジャズも聴かにかあいかな、と少し遅れを感じているベテラン・ジャズ・ファンにもってこいのプレゼントが9曲目のこの曲だ。こんなの「Cジャム・ブルース」ではないよと初めはおかんむりだが、やがてニコリのあなたの顔が見えるようである。

ハイ・スピードが定石の「Cジャム・ブルース」にも、こんなロー・スピードのアプローチがあったのだ。ビル・チャーラップはこうした意味で垣根の中で垣根を越えているのである。

というようなことを考えつつ(8)のボタンを押すと一転、チャーラップの別のジーニアスが襲ってくる。

いま私は、ご近所の耳をはばかりながらボリュームを目一杯上げて聴いているが、いや、この強力猛スピードのスイングの凄いこと。チャー

ラップの本質はバラードにありと言いつつ、舌の根も乾かぬうちにハイ・テンポ・スイング・ナンバーもチャーラップの特産物などとほざいている私は裏切り者には違いないが、しかしこれを聴いてはオツに澄ましていられない。身体があちこち、動き出して止まらないのだ。

たとえば、レッド・ガーランドのスイングは「大きなスイング」である。それに比べればチャーラップのそれは「小さなスイング」である。

一般的には大きなほうが良しとされるが、しかしこのチャーラップを聴いては、大きいことは良いことだと言っていられない。小さいものなかなかやるじゃないか、そこに考えが行ったときに新しいジャズになついでゆけるのである。

新しいジャズといえば、ドラムとベースの新しいはたらきに目をつけなければいけない。急転直下、昔に比べドラムとベースの役割は変わっているのである。

3人の中ではビル・スチュワートがいちばん新しい考え方をしている人である。今回はドラムに光を当てるが、ビル・スチュワートなくしてニューヨーク・トリオはあり得ない。

特にこの曲でのリズムックな快感。あちこち動きまわる目まぐるしい小技の集積。私などドラム・ファンはたまらないのである。ジーンとしびれてくるのである。新しいジャズのファンになってよかったなあと思う一瞬だ。50～60年代のブルーノートやプレステージばかり聴いている人は、こういう快感にエンがないのだから、早くエンを結ばばいいのになあと要らぬおせっかいをやきたくなって困ってしまう。

ビル・チャーラップはクリスコロス・レーベルでビル・スチュワートと共演していた。ベースがショーン・スミスだった。90年代の半ばだったが、このトリオは少しだけフリー風味もあり、クリスコロスらしい進歩性を表現していた。

そのトリオに比べると、ニューヨーク・トリオはオーソドックスである。ビル・スチュワートの叩き方が違う。より伴奏型であり、進歩発展型を目指すというよりスイングの深さを追求している。形をさておき、中味を濃く叩いているのだ。ニューヨーク・トリオにおけるスチュワートの演奏法とは、そのような演奏法である。ドラマーは叩き分けているのである。

さて、ビル・チャーラップはビル・スチュワートに助けられている、という言い方がよくされているようだ。あまり好きな言い方ではないが、その言わんとする気分はよくわかるのである。

とにかく、ビル・チャーラップ・トリオではない。契約関係でビル・チャーラップをメインに立たせられないという事情があるようだが、ここはニューヨーク・トリオの呼び方でピツタリのような気がする。3人の音楽、共同作品、そういうことだ。

音について書かないわけにはゆかない。

音の良しあしがかしはしばし演奏の良否を決めてしまうことがある。1940年代のチャーリー・パーカーの演奏は、音が劣悪だから良く聴こえない。私は、そういう聴こえ方は、自然だと思う。

ニューヨーク・トリオは音がいいから演奏もすばらしく聴こえる。これもまた自然である。

ヴィーナスの諸作品の音質はどのようにいいのか。音がきれいとか透き通っているとか、そういうことではない。音が飛び出るのである。チューンのいい装置で聴くと音が凸凹である。平面ではない。このことがステージを感じさせるのである。つまり、生演奏のような音なのだ。

私のシステムではちょうどベーシストの前で聴いているような塩梅だ。ベースの音が大きくて、ドラムも大きい。そしてピアノが少し小さい。

皆さんはどういう音がお好きなのだろう。ジャズの最もピアノ・トリオらしいピアノ・トリオを聴くには、そのバランスがいちばんびつたりのような気がするのだが。

寺島靖国